

今の特集

【令和元年産酒造好適米の生産量（推計値）】

令和元年産酒造好適米の生産量を農産物検査結果から推計し、生産動向と需要動向の検証を行いました。

概要は以下のページで紹介しています。より詳細な情報は、下記URLよりご参照ください。

http://www.maff.go.jp/j/seisaku_tokatu/kikaku/sake.html

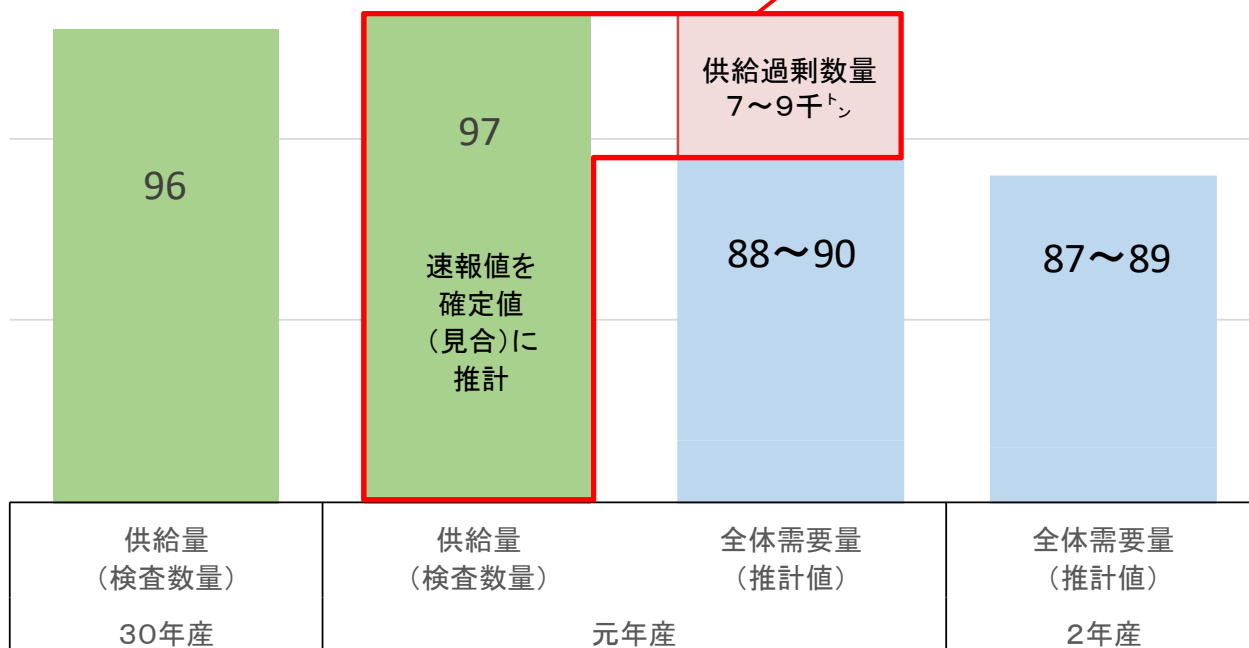
【令和元年産酒造好適米の生産状況】

- 令和元年産酒造好適米の農産物検査数量（12月31日現在）がとりまとめられ、生産概況が明らかとなりました。これを元に令和元年産酒造好適米の生産量を推計したところ、97千ト程度と平成30年産と同程度の生産量が見込まれます。
- この結果、令和元年産酒造好適米の全体需給は、生産量が需要量を7～9千ト程度上回る状況と見込まれます。
- 令和2年産の作付けに当たっては、需要量調査結果や生産量等のデータを参考にしつつ、自らの生産量や販売動向、酒造メーカーからのニーズ等を踏まえ、需要に応じた生産に取り組むことが重要です。また、将来にわたって酒造好適米の安定生産・安定調達が可能となる複数年契約に取り組むことも重要です。

酒造好適米の全体需給状況見通し(推計)

(単位:千ト)

令和元年産の生産量が概ね明らかとなったことから今回検証。



注1: 供給量は、農産物検査数量(醸造用玄米)の値。ただし、令和元年産は、令和元年12月31日現在の速報値を直近3カ年の12月31日現在の農産物検査数量の進捗率により確定値見合いに推計。

注2: 令和元年産及び令和2年産の需要量は、令和元年7月に実施した需要量調査結果から推計したものであり、それ以降の酒造メーカーにおける需給状況により変動する可能性があることに留意する必要がある。

令和元年産酒造好適米の銘柄別生産状況

- 令和元年産酒造好適米の生産量は、直近3カ年の12月31日現在の農産物検査の進捗率から97千トと推計され、平成30年産とほぼ同程度の生産量となる見込みです。
- 主要な品種では、昨年に比べて作柄の良かった山田錦及び美山錦は微増となる一方、五百万石は減少する見込みです。

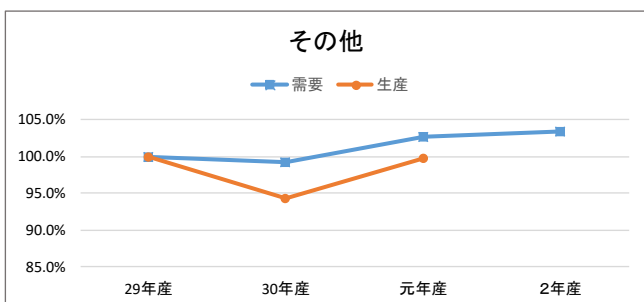
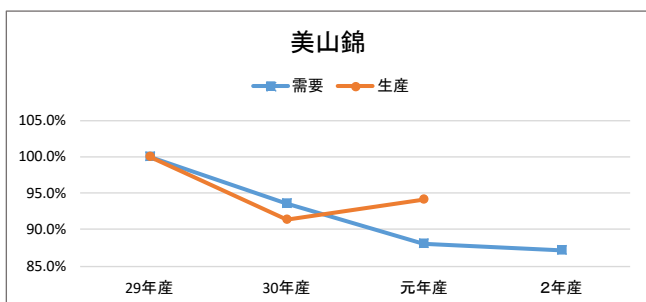
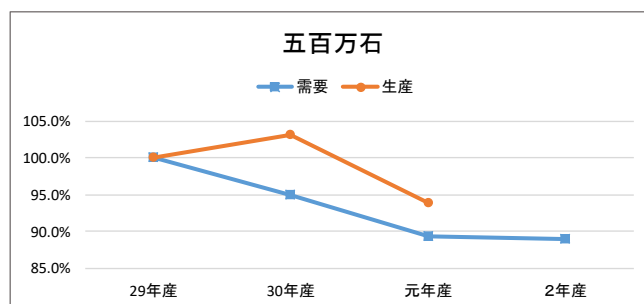
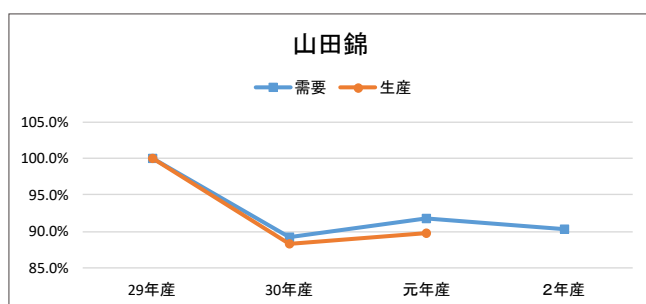
農産物検査数量（12月31日現在）及び令和元年産生産量の推計

（単位：トン、％）

品種	28年産		29年産			30年産			元年産		
	12月31日現在	確定値	12月31日現在	確定値	対前年比	12月31日現在	確定値	対前年比	12月31日現在	推計値	対前年比
山田錦	36,563	37,257	37,558	38,431	103.2%	33,071	33,916	88.3%	33,744	34,503	101.7%
五百万石	22,644	26,030	19,017	20,564	79.0%	18,935	21,203	103.1%	17,315	19,324	91.1%
美山錦	7,272	7,513	6,977	7,018	93.4%	6,239	6,408	91.3%	6,465	6,604	103.1%
その他	33,165	35,817	33,490	36,388	101.6%	32,153	34,330	94.3%	33,576	36,277	105.7%
総検査数量	99,644	106,618	97,042	102,400	96.0%	90,398	95,856	93.6%	91,099	96,708	100.9%

生産量と需要量の増減率の比較（平成29年産基準）

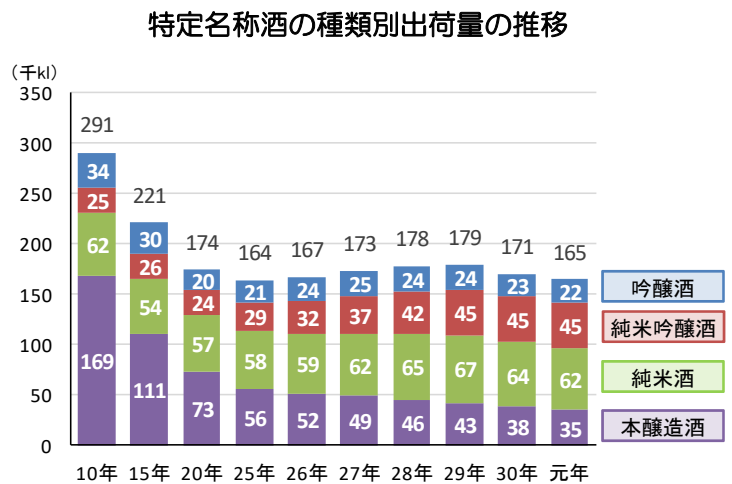
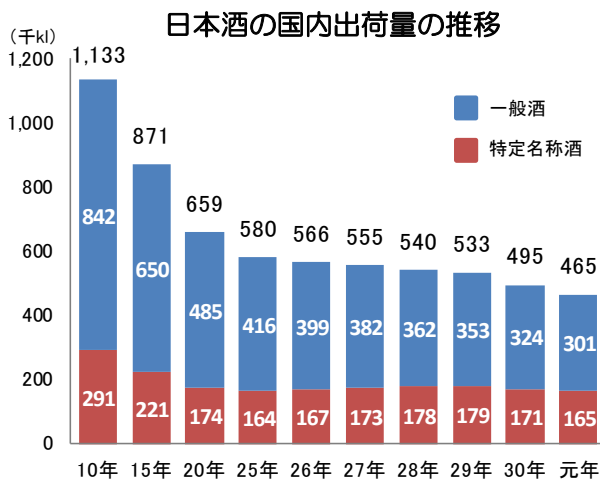
- 平成29年産を基準として酒造好適米の生産量（農産物検査数量）と需要量（需要量調査報告数量）の増減率を比較すると下図のとおりであり、全体的にはほぼ需要の増減の動きに応じた生産動向となっていることがうかがえます。
- 下図は需要動向に応じた生産動向となっているかを増減の動きで検証したものであり、定量的、地域的な需要の過不足を表しているものではないことに留意が必要です。したがって平成29年産において需要が均衡していたとするものではありません（平成29年産は酒造好適米全体で生産量が需要量を9%程度上回る状況）。
- 令和2年産に向けて、各産地においては、産地品種銘柄ごとの生産量と需要量の増減率や作況等のデータを参考にしつつ、これまでの自らの生産量や販売動向、酒造メーカーからのニーズ等を踏まえ、引き続き、需要に応じた生産に取り組むことが重要です。



以上のほか、産地品種銘柄ごとの生産量と需要量の増減率等の詳細な情報は、以下のURLを参照ください。
http://www.maff.go.jp/j/seisaku_tokatu/kikaku/sake.html

日本酒の国内出荷状況

- 日本酒の国内出荷量は、ピーク時（昭和48年）には170万klを超えていましたが、他のアルコール飲料との競合などにより、近年は50万kl程度まで減少しています。
- 一方、日本酒全体の国内出荷量が減少傾向で推移する中で、消費者の志向が量から質へと変化していることから、国内出荷量全体に占める特定名称酒（吟醸酒、純米酒等）の割合は増加傾向で推移しています。
- 平成30年は、日本酒の国内出荷量が前年比▲7%と大幅に減少し、特定名称酒についても、純米吟醸酒は堅調であったものの、本醸造酒等の減少により特定名称酒全体としては減少に転じました。令和元年においても、国内出荷量は前年比▲6%となっており、前年と同様の傾向が続いています。



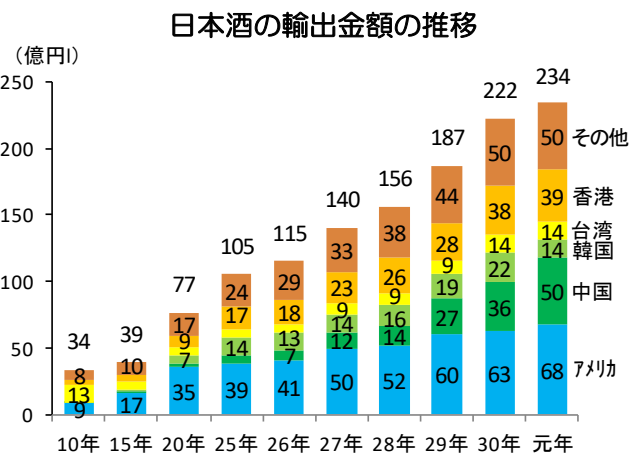
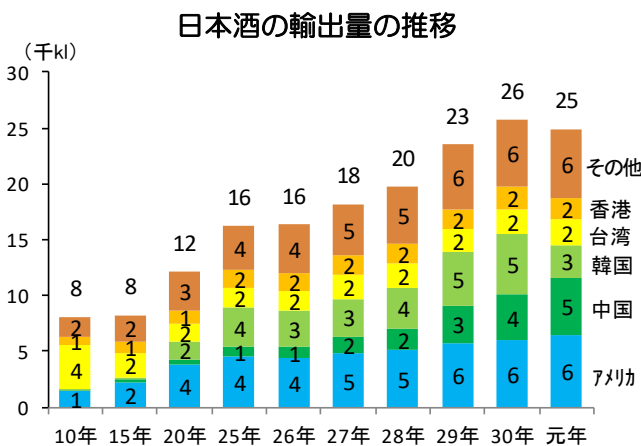
資料：日本酒造組合中央会調べ。年は暦年。

注1：国内出荷量は、清酒課税移出数量で元年は概算値。

注2：日本酒は、一般酒のほか、原料、製造方法等の違いによって吟醸酒、純米酒等8種類に分類され、これらを総称して「特定名称酒」という。

日本酒の輸出状況

- 日本酒の国内出荷量が減少傾向にある中、輸出については、海外での日本食ブーム等を背景に増加傾向にあります。また、日本酒の全出荷量に占める輸出量の割合は約5%にまで増加しています。ただし、元年の輸出量は減少に転じており、今後の動向に注視が必要です。
- 輸出先では、アメリカ、中国への輸出は増加している一方、韓国への輸出数量は減少しています。



資料：「貿易統計」（財務省）。年は暦年。